



知性のリング
言論

倉山満の
ストロング
スタイル

vol. 08

北朝鮮という猛毒を持った蜂が蠢動している。そして、この厄介な蜂をどうしたものかと、東アジアという蚊帳の中で米中露の3大国がにらみ合っている。では、日本は蚊帳の外なのか？

それは絶対ない。なぜならば、日本が蚊帳そのものだからである。より正確に言えば、蚊帳の一部か。

韓国という蚊帳が破れた以上、アメリカは日本を虫よけの蚊帳にしているのである。だから、日本が蚊帳の外などということは絶対ない。アメリカとしては、中国・ロシア・北朝鮮、その3国に媚びる韓国への壁にしたのだから。だが、壁にするには脆弱すぎる。よって、日本は蚊帳

我が国の安倍晋三閣下がこれで良いと考えているかどうかは知らないが、少なくとも米中露と張り合えるような大国になる道を選んでいないことだけは確かだ。

そもそも大国とは、「その国の意向を聞かなければ話がまとまらない国」のこと、すなわち発言力のある国のことである。では、何か問題が起きた時に話し合いで解決しなければ、

どうするか。軍事力により決着をつける。大国とは結局は軍事力のある国のことであり、究極の軍事力とは核兵器のことなのである。核兵器こそが発言力の象徴なのである。これが現実だ。

となど、何とも思っていないのだ。こんな国を相手に、力の裏付けなしにマトモな話ができるはずがない。では、日本と北朝鮮、どちらがマトモな国に見えるか。もちろん、「人を殺してはならない」という価値観が通じる一点で、日本が文明国であり、北朝鮮は野蛮である。しかし、国としての合理性で考えれば北朝鮮なのである。

北朝鮮は、生き残るためには手段を選ばない。中国やロシアに対しては平気で裏切る。一方で、自分の命が危ないと思えば、平気で土下座もできる。これまでのアメリカと違い、ドナルド・トランプ大統領が北朝鮮を甘やかさないと見るや、さんざん

トランプ米大統領の 外務大臣として 忠勤する安倍晋三首相

盾突いてきた中国の習近平に媚びへつらう。これが北朝鮮の合理性だ。「生き残る」の一点で、ぶれない。

一方で、我が国はどうか。「トランプ内閣の外務大臣」として忠勤に励む、の一点である。しかも、それでリアリストを気取っているから始末に悪い。

トランプ大統領は大統領選挙の最中から世界中から目をつけられていた。理由を一言で言えば、「第2次世界大戦後の秩序を根底から変えようとしているから」である。中国やロシアのような「人を殺してはならない」という価値観が通じない国を甘やかさないという姿勢を明確にしたが、これは現状維持を求めるヨーロッパ諸国からも反感を買った。それどころか、自国の国務省が事実上のポイコットの態度なので、外交機能は麻痺に近い。だから、トランプの友人は世界中にイスラエルのベンヤミン・ネタニヤフと安倍首相しかいないとも言われる。

特にインドから東を見よ。インドは核保有国で力はあるが、伝統的に反米だ。建国以来、宿敵のパキスタンにアメリカが肩入れしてきたのを、インドは忘れていない。ASEAN諸国は中国の脅威がありアメリカを頼ってきているが、いかにせん軍事力が足りない。ついでに言うと、韓国は力がなく信用ならない。このような状況なので、インドやASEAN諸国とアメリカを仲介している日本の安倍首相は「トランプ内閣の外務大臣」なのである。

安倍外交の基軸は「世界中から嫌

われているトランプと他の国の仲介をしていけば、誰からも恨みを買わない」と考えていることだ。証拠もある。トランプは大統領就任前後には「日本には対等の同盟国としての態度を求める。自分の国は自分で守ってほしい。核保有も構わない。その為には、まず防衛費をGDP2%にする努力から始めて行動で示してほしい」と求めてきた。ところが安倍首相は最初の訪米でトランプが世界中から嫌われていることに付け込み、「トランプ内閣の外務大臣」として忠勤することを条件に、取引した。帰国後のNHKのインタビューでは、自主防衛や核武装は「終わった話」と切って捨てた。

要するに、安倍首相には日本を大

国にする意思はないのだ。それは、米中露に対する発言権を放棄するどころか、北朝鮮にも言うことを聞かせられないという意味だ。拉致被害者も自力で取り返す気はなく、アメリカに取り返してもらおうということなのだ。

ついでに言うと、こんな国にロシアが北方領土を返すと思うなら、頭がおかしいと断定せざるを得ない。ウラジミール・プーチン大統領は、マフィアの親分そのものである。そんな人物に安倍首相が何回会おうが「本気で欲しいなら、力で取りに来い」と臆散らされるのが関の山だ。今までもそうだった。

安倍首相は「一強」だの「外交が得意」だのと持ち上げられがちだが、

一皮むけばこんなものだ。自民党反主流派や野党が弱すぎるから「一強」に見えるだけだ。また「トランプ内閣の外務大臣」の地位とて永遠ではない。

情けない限りの我が宰相だが、なぜこうなったか。政権返り咲き最初の半年はアベノミクスで絶好調だったが、13年10月1日に状況が激変した。消費増税8%を宣言させられたのだ。デフレ脱却前の増税など自殺行為である。ところが、安倍首相は圧力に逆らえなかった。

自民党の9割、公明党のすべて、当時の最大野党民主党政の幹部全員、財界主流派、主要労働組合、新聞の6大紙とキー局全部が、安倍首相に「デフレ脱却前の消費増税」を押し付け、抗しきれなかった。

号令をかけたのは、時の財務事務次官木下康司。官僚機構の頂点に立つ木下の前に、安倍は無残にも敗れ去った。

その後、2度の増税延期をしたが、そのたびに国政選挙を行っている。この国は、官僚が決めた増税を延期するのには、国民が選挙をしなくてはならないのだ。いちいち！

では、こんな状況がいつまで続くのか。現在、日本の中核で異変が起きている。

続報を待て。チャンスは、ある。



4月18日、共同記者会見で握手を交わす安倍晋三首相(左)とトランプ米大統領(右)。わずか1か月半後の6月7日、ホワイトハウスで両首脳の間で会談が決定している。写真/時事通信社

持ち上げられがちな 安倍首相は 反対勢力が 弱すぎるだけ

倉山 満・憲政史研究家

73年、香川県生まれ。96年中央大学文学部史学科を卒業後、同大学院博士前期課程を修了。在学中より国士館大学日本政教研究所非常勤職員として、15年まで同大学で日本国憲法を教える。12年、希望日本研究所所長を務める。同年、コンテンツ配信サービス「倉山塾」を開講、翌年には「チャンネルくらら」を開局し、大日本帝国憲法や日本近現代史、政治外交について積極的に言論活動を展開。ベストセラーになった「嘘だらけシリーズ」など著書多数